

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

2024年 11月 12日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 藤 洋作 様

所属部局 生命科学研究所

職名 教授

氏名 井垣 達史

助成の種類	令和6年度・国際会議開催助成		
国際会議名	4th International Symposium on Cell Competition		
開催期間	2024年 9月 4日 ~ 2024年 9月 5日		
開催場所	京都ガーデンパレス		
参加者	総数 139名	内訳 国内:119名 海外:20名	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	事業に要した経費総額	4,735,567 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	<small>(機関や資金の名称) 上原記念生命科学財団・Leica Microsystems・Disease Models & Mechanisms・ナカライテスク㈱・和研薬㈱・㈱マ イクロアイズ・㈱東京インストルメンツ・日本学術振興会(学術変革領域(A))</small>	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費目	金額 (円)	財団助成充当額 (円)
	会場費・備品費	849,217	816,785
	飲食費	1,741,644	0
	旅費交通費	1,478,816	0
	印刷製本費	176,000	176,000
謝金	7,215	7,215	
エクスカージョン	437,800	0	
雑費	44,875	0	
合計	4,735,567	1,000,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 他財団と比して助成金額が大きく、運営の大きな支えとなりました。ありがとうございました。より柔軟な使途(交流会での飲食費やコーヒーブレイク等)をご検討いただけますとさらに大きなご支援になると思います。		

成果の概要/井垣達吏

令和6年9月4-5日の2日間、京都御所を眼前に臨む京都ガーデンパレスホテルにおいて、4th International Symposium on Cell Competition (第4回細胞競合国際シンポジウム)を開催しました。本シンポジウムでは細胞競合の研究分野で世界をリードする研究者がアメリカ、オーストラリア、フランス、スペイン、ギリシア、ポルトガル、中国、シンガポールなど世界中から一堂に介し、未発表データを含めた最新の成果について発表及び議論を行いました。参加者は総勢139名にのぼり、会場は満席となりました。

Keynote lectureでは細胞競合の発見者である Ginés Morata 教授(Autonomous University of Madrid)にご講演いただきました。1900年代後半のモザイク誘導手法の話題に始まり、1975年にご発表されたショウジョウバエ翅原基におけるリボソームタンパク質遺伝子ヘテロ変異細胞の消失現象(細胞競合)の発見、Super-competition、Group protectionなどの重要なコンセプトの発見、哺乳類における細胞競合の保存性、そして細胞競合によるがん制御に至るまで包括的なお話をさせていただきました。そして、細胞の競合的コミュニケーションの研究に従事する国内外25名(うち海外14名)の招待演者の方々にご講演をいただき、発生における細胞競合の意義、細胞競合によるがんの制御、細胞競合の人工合成系の構築など、多岐にわたるトピックスについて最新の研究成果をご発表いただきました。さらに、一般参加者から募集した30演題のポスター発表(うち海外3名)を実施しました。

また、国際シンポジウムの醍醐味は最新の研究成果の発表・議論はもちろんのこと、世界中の研究者と胸襟を開いて交流ができることです。参加者がよりリラックスして交流できるように京都らしい趣向を凝らした意見交換会にも多数のご参加をいただき、特に大学院生や学部学生などの若手研究者には世界中のトップ研究者と交流する大変素晴らしい機会となりました。



4th International Symposium on Cell Competition 集合写真

さらにシンポジウム2日目には東京大学大学院薬学系研究科三浦正幸教授の司会で細胞競合の定義や今後の細胞競合研究の方向性などについてパネルディスカッションが行われ、多くの活発な意見、提案がなされました。ディスカッション全体を通じて感じられたことは、細胞競合を制御する分子メカニズムが徐々に明らかになってきたこともあり、細胞競合の研究が一つの転換期に入ってきたということです。

また、2日目午後に行われた京都エクスカージョンにも多数のご参加をいただきました。大型バス2台に詰め込まれて約半日間行動を共にしたことで道中の研究ディスカッションにも一層花が咲きました。平等院鳳凰堂や清水寺など、京都を代表する観光地を巡りながら交流を深めることができました。



パネルディスカッションの様子

2017年8月に第3回大会を札幌で開催して以降、新型コロナウイルス感染症パンデミックへの対策としてオンラインミーティングなど研究室単位での会議や小規模な細胞競合研究会議は継続して実施してきたものの、オンサイトでのシンポジウム開催は見送らざるを得ない状況が続きました。今回、約7年の中断期間を経てオンサイトでのシンポジウムを京都で開催することができました。本シンポジウムの運営につきましては、極力簡素に行うことを旨としてスタートしましたが、諸費用高騰の折、研究費からの予算だけでは十分な運営が難しいという困難に直面し、貴財団からの助成を頂けたことで非常にスムーズに企画・運営を進めることができ、盛況のうちに終了する事ができました。ご支援を頂きました京都大学教育研究振興財団に深く感謝申し上げます。